

## 書評・紹介

### 小林和正著『東南アジアの人口』

東南アジア研究叢書19, 創文社, 1984年2月, A5: 379ページ

アジアに位置する我が国にとって、東南アジアはきわめて重要な地域であることはいうまでもない。現在、アジア全域の人口は約28億人、世界人口の58%を占めているが、その中で国連が東部南アジアと区画している地域の人口は4億人である。これはアジア全域の人口の14%に当たる。本書が対象にしている東南アジアとはこの地域であり、国としてはベトナム、カンボジア、ラオス、タイ、ビルマ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、ブルネイ、フィリピンの10カ国を含む。

著者の小林和正教授は厚生省人口問題研究所に30年近く勤務された後、京都大学東南アジア研究センター教授として7年間、停年退官後は日本大学人口研究所教授として人口研究を続けておられる。

本書は京都大学東南アジア研究センターに在職中の研究成果をまとめられたものであり、東南アジアの人口に関する研究書として、いろいろな点からみてきわめて個性のある、価値の高い書物である。なによりも、この書物は東南アジア人口の「人口学的研究」という立場を一貫して書かれている点に注目すべき特徴がある。

我々が人口問題というときには、人口の規模や構造の変動が経済、政治、社会等に対して与えるインパクトを問題にするのであるが、人口学的研究は、著者の指摘のように、逆に、人口の規模、構造の特徴やその変動を正確にとらえ、さらにそれが何によって規定されるかを解明することにある。

東南アジアの人口については、周知のとおり、その人口問題がきわめて深刻であるが、しかし、肝心の人口学的研究は十分に進んでいず、その構造と変動の正確なものはあくに欠けているところが多かった。その意味でこの書物が人口学的研究の立場からする包括的な成果としてまとめられた意義はきわめて大きい。

本書は、まず第1章において先史時代から原史時代、歴史時代に入るまでの東南アジアの人口史について述べているが、現在4億人という人口を擁するこの地域の古い人口史がどのようなものであったのか、評者にとっては全く専門外の事ではあるが、それだけになかなか興味深い導入部である。しかし、本書の核心部は第2章以下において、計数的な人口データにもとづいた議論が展開されている部分にある。

第2章は、タイ、マレー半島、インドネシア、フィリピン、その他諸国について、主として19世紀以降の人口増加の趨勢を取り扱っている。第3章は、とくにタイ国を対象に人口増加の地域構造の分析に当てられている。この章の焦点は国全体の高率の人口増加の大部分が農耕地域で吸収されている点に見出される。第4章では死亡率の推計、死亡率水準の推移、さらに死亡率の年齢パターンの分析が行われているが、そのなかで、東南アジア諸国の死亡率の水準は先進諸国が過去に通過してきた水準に対応させることが出来るが、しかし死亡率の年齢パターンについて比較すると、先進諸国のそれとは異なる特徴をもっていることが指摘されている。最後の第5章においては、出生とその抑制の問題が取り扱われている。この章では出生率の動向についての分析のほか、近年における出生力低下をめぐる議論が展開されている。

東南アジアの人口学的研究にとって最大の問題は人口統計データの不備である。しかし第2次大戦後、欧米における人口学の発展はこの問題の解決に対して大きな貢献をなしつつある。小林教授は戦後人口学の研究成果を余すところなく取り入れ、さらに批判的検討を加えたいうえでの確かな判断を下しておられる。また今後に残された問題点を指摘して後進のための指針としておられる。その意味で本書は東南アジア人口研究の貴重な礎石である。

(岡崎 陽一)